

《夏休みのブックガイド》

戦争に関わる子どもの本 2 冊

藤田のぼる

8月といえば「戦争」というのは、良くも悪くも日本人の体質みたいになっていて、日本人の戦争観がその実態とは乖離して“被害”の方に傾いてしまうのを助長している面がなしとはしません。それでも、放送の世界なども含めて、この時期に合わせて戦争に関する企画がたてられることで、わたしたちが



戦争について考える大きな契機になっていることはまちがいないでしょう。

今回の本題からいきなり外れる話になりますが、敗戦の8月15日が、旧盆の13日とほとんど重なる時期であることは、偶然とはいえ、“鎮魂”というモチーフをいやが

↑photo:落合健人 (サンライズガーデン)

うえにも高める役割を果たしているように

思われます。この数字の不思議さは、敗戦の「昭和20年」という年にもいうことができ、徴兵年齢は20歳でしたから（最後は19歳に引き下げられました）、基本的に昭和生まれは（志願すれば別ですが）軍隊経験はないし、大正生まれは軍隊経験があることになります。例えば長崎源之助は、大正13

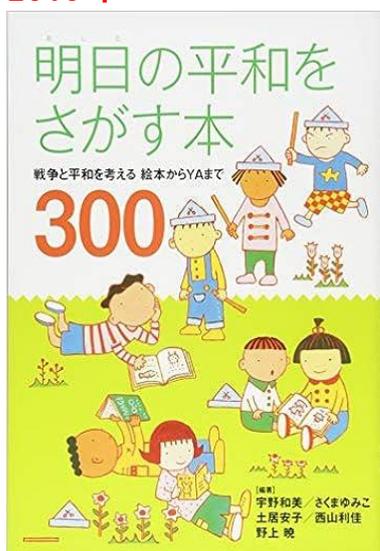
（1924）年生まれで、その従軍経験がなければ『あほうの星』を始めとする戦争児童文学は、おそらく書かれなかったでしょう。逆に昭和2（1927）年生まれの子田足日には軍隊経験はなく、児童文学の「戦後派」を代表する論客となっています。その狭間といえるのが、子どもの本研究会の会長なども務めた作家の鈴木喜代春で、大正14年（1925年）7月生まれ。敗戦の一か月前に20歳になりました。師範学校に在学中の彼は、8月30日に弘前歩兵連隊に入隊せよとの通知を受けていました。その直前に敗戦となったものの、「私は『戦争に負けたから、入隊しなくてよいのですか』と、誰かに尋ねたいのです。でも、誰に聞いたらよいのかわかりません。『入隊しないで、死刑になるのでは……。』そのように考えるのでした」と、当時の心境を綴っています。

よく言われることですが、学徒動員や学童疎開なども含め、「あと一年早く生まれていれば」「あと半年遅く生まれていれば」といった、シビアな「もしも」が、戦争をめぐることは、いろいろ語られることになるわけです。

さて、アジア・太平洋戦争の敗戦から78年目の夏がめぐってきましたが、子どもの本の世界でも、戦争体験から時間的に離れていくことを嘆くばかりでなく、むしろ新しい事実を掘り起こしたり、新たな視点を導入することで、戦争というものの本質をあぶりだそうとする試みが重ねられてきました。また、いうまでもなく、78年前とは比べものにならないほど、核兵器を始めとする兵器は進化し、人類史的な危機が強まっています。これらをどう捉え、子どもたちにどう提示できるのか、そうした子どもの本における〈戦争〉をテーマ、題材とした本のガイドブックは、おそらく「戦争児童文学」という言葉がそれなりに定着した1970年代を起点として、結構出ているように思います。今回、この機会に、そうしたガイドブックの新しい傾向を感じさせる2冊を紹介させていただきます。

前置きが長くなりましたが、現代児童文学を一応専門としている僕も読んでない本が少なくなかったですし、改めてさまざまな切り口からこのテーマに迫っている本が多いことに、うれしい驚きを感じることができました。ということで、機会があれば、まずはこうした本を開いていただき、そこで興味を惹かれた本を、1冊でも2冊でも手に取っていただければと思います。

**『明日の平和をさがす本～戦争と平和を考える 絵本からYAまで300～』
宇野和美・さくまゆみこ・土居安子・西山利桂・野上暁／編著、岩崎書店、
2016年**



全体が8章からなりますが、その章タイトル（やその順序）に本書の特徴がよくあらわされていると思うので、以下並べてみます。「戦争ってなんだろう?」「生きるための冒険」「声なきものたちの戦争」「子どもたちの体験」「絵のちから 音楽のきぼう」「伝える人 語りつく意志」「勇気ある決断 未来への思い」「平和をつくるために」の8章です。ここでは、その中で、第5章の「絵のちから 音楽のきぼう」と6章の「伝える人 語りつく意志」を見てみます。

まず第5章。最初に紹介されているのは『おじいさんのチェロ』。戦火の街に、毎週水曜日にやってくる救援トラック。ところがそのトラックも爆撃されてしまいます。がっかりしていた女の子が窓から広場を眺めていると、気難しそうで敬遠していたお(オー)じいさんが正装で現れ、チェロを弾き始めます。ポロポロの広場がコンサートホールになるのです。戦争がなによりも人間性を破壊するものであること、そしてそれに抗する人間の力が示されます。この絵本は、ゴダイゴのタケカワユキヒデの訳です。それからアフガニスタンを舞台にした、小林豊の『せかいいいちうつくしい村へかえる』、ベン・シャーンの絵をモチーフにしてアーサー・ビナードが構成した『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』、ナチスから間一髪逃れてアメリカに渡った「おさるのジョージ」の作者を描いた『戦争をくぐりぬけたおさるのジョージ 作者レイ夫妻の長い旅』、そして22歳で戦死した弟への思いを綴った『やなせたかし おとうとものがたり』など、多彩な本が並びます。戦争を描いた作品にある種の押しつけがましさを感じて、若い読者がなかなか手に取らないという話もありますが、これだけさまざまな入口があれば、どれかには興味を惹かれるのではないのでしょうか。

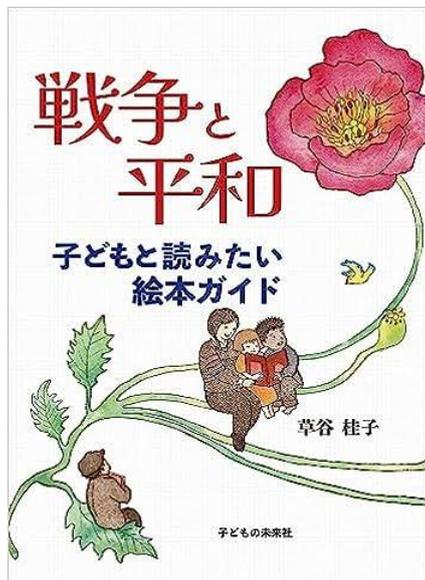
そして第6章の「伝える人 語りつぐ意志」では、ビキニ環礁の核実験を題材にした写真絵本『ふるさとにかえりたい リミヨおばあちゃんとヒバクの島』、令丈ヒロ子の『パンプキン！ 模擬爆弾の夏』、『ゴジラ誕生物語』、『戦争といのちと聖路加国際病院ものがたり』、さらに『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？ ベトナム帰還兵が語る「ほんとうの戦争」』といった物語、ノンフィクションが並びます。ここからは、戦争の事実を受け継いでいくこと自体が、意味のある闘いであり、思想を深めていくことだということが、伝わってくるように思いました。

以上は、(なにしろ300なので)本書で紹介されているうちのほんの一部です。それでも、その幅の広さがおわかりいただけだと思いますが、実はここで紹介されている本はすべて2000年以降に刊行された本で、この期間に、若い人たちのためにこれだけの本が提示されていることに、ちょっと(かなり)元気をもらえました。

『戦争と平和 子どもと読みたい絵本ガイド』草谷圭子著 子どもの未来社 2023年

こちらは2023年6月、出たばかりの本です。これもまず、章立てから紹介します。「「平和」って、どんなこと?」「「戦争」ってどんなこと? どうして起こるの?」「ほんとうにあった戦争の話」「戦争が起こると」「戦いが終

わっても」「戦争をやめる・戦争を起こさせない」「希望につなぐ」の7章です。そして、例えば第1章の「「平和」って、どんなこと？」は「「いのち」って?」「「友だち」って?」「「ちがい」って?」「「平和」って?」と、さらに四つの項に分かれています。例えば「いのち」の項では、『あかちゃんのゆりかご』や『せいめいのれきし』、「ともだち」の項では、谷川俊太郎・和田誠の『ともだち』や『きょうりゅうたちがけんかした』など、必ずしも戦



争そのものを題材にした絵本ばかりでなく、戦争と平和を考える前提になるような絵本も紹介されていて、これも従来のリストよりかなり幅広い視点を持っていることを、まずは感じさせられました。

ここで気になるのは、やはり終りの方の第6章「戦争をやめる・戦争を起こさせない」、そして第7章「希望につなぐ」でした。今、子どもたちの目の前でロシアによるウクライナ侵攻が進行し、そこから子どもたちは、戦争の悲惨さと共に、ともすれば

「戦争をやめさせることはできないのだ」、あるいは「戦争をやめるには、強い力で相手をやっつけるしかないのだ」という印象をもってしまわないかということが危惧されます。戦争ということを語るとき、なぜ戦争が起ってしまうのか、どうやって戦争をやめさせることができるのかという問いに答えていくことが、とても重要だと思うのですが、言うまでもなく、これはとても難しい。この章の選書には著者も一番苦労したのではと、開いてみました。

第6章は二つに分かれていて、「戦争をやめるには」の項では、最近話題になった『せんそうをやめた人たち 1914年のクリスマス休戦』、ジャンニ・ロダーリの『キンコンカンせんそう』、デビッド・マッキーの『せかいで いちばん つよい国』、さらに『はなのすきなうし』などが並んでいます。そして、二つ目の「戦争をおこさせないために」の項では、西郷南海子・作／浜田桂子・絵の『だれのこどももころさせない』、自由と平和のための京大有志の会・文（塚本やすし・絵）の『戦争と平和を見つめる絵本 わたしの「やめて」』、井上ひさし・原案（武田美穂・絵）の『「けんぼう」のおはなし』、長瀬正子・文／momo・絵の『きかせてあなたのきもち 子どもの権利ってしっ

